

第2回「難民映画祭」開催

2007年7月18日~26日(東京)

会場：東京日仏会館、イタリア文化会館、スウェーデン大使館、Goethe-Institut ドイツ文化センター
協賛：株式会社ABC Cooking Studio、キャノン株式会社、
光都東京実行委員会、株式会社富士メガネ
協力：A.R.T. Collection、株式会社バービーハウス、
株式会社クリエイティブ・ガレージ、株式会社ディー・アンド・アイベックス、
ソニー株式会社、オグルヴィ・アンド・メイザー・ジャパン株式会社

国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) 親善大使
アンジェリーナ・ジョリー

"Film is an important medium to introduce the many aspects of the lives and circumstances of refugees across the world, and through this entertainment vehicle, create better awareness and understanding."

「映画は、難民がおかれた状況や生活のさまざまな面を私たちに見せてくれる大切なメディアであり、映画というエンタテインメントを通じて、難民問題に対するよりよい意識や理解が育まれていくことでしょう」

世界各地で起きている紛争や迫害によって故郷を追われる人々-難民の問題に焦点を当てた映画30本を上映する「難民映画祭」が今年で第2回をむかえた。

難民問題を身近に感じ、より深い理解と啓発、支援を行う目的で始まった「難民映画祭」。故郷を追われるということに馴染みが少ないこ日本で、難民とはどのような人々なのかをビジュアルで伝える映画は格好のツールとなっている。テレビ、ラジオ、新聞、雑誌など多数のメディアに取り上げられ、今年はプレ上映を含め、昨年の2倍となる約7000人が来場した。

第8代国連難民高等弁務官緒方貞子さんから寄せられたメッセージやこの映画祭ならではの特別イベントは大きな魅力だ。世界の医療団日本支部名誉委員会会長フランソワーズ・モレシャンさんを招いての講演や元カンボジア難民であったリティー・パニユ監督、『TAIZO』の中島多圭子監督とのトークセッション。そしてケニアの難民キャンプで作られた難民による映画の上映後にはSkype(スカイプ)を利用して、製作者である難民と会場との交流も実現した。

自分たちにできる難民支援はないのか…困難な状況の中でも力強く生きる人々の姿に触れ、多くの声が寄せられた。難民が私たちと同じように自己表現し、尊厳をもって生きる人々なのだ気づくこと。これも難民支援の第一歩である。

関連情報：http://www.refugeefilm.org/



会場内の様子 (Goethe-Institut ドイツ文化センター) ©UNHCR

「難民映画祭」に寄せて



駐日ルワンダ共和国特命大使

エミール・ルワマシラボ閣下

"When refugees finally go back home, they may face another predicament, that is, reconciliation. There, forgiveness is an essential element. Refugee Film Festival is an excellent tool to deliver such important messages to those who are not familiar with refugee issues."

難民がようやく母国に帰還しても、彼らは和解という新たな課題に直面するかもしれません。このような和解には相手に対する寛容な心が必要となります。「難民映画祭」は難民問題になじみのない方々にも重要なメッセージを伝える素晴らしい手段です。

映画が拓く可能性



エイベックス・マーケティング株式会社

飯島真さん

第2回「難民映画祭」も大成功でしたね。本当に素晴らしい事だと思います。

この春劇場公開されたアフリカ諸問題を題材とする映画が現在軒並みDVD化され、今度はDVD店頭も熱くなってきております。本作(『ルワンダの涙』)も劇場公開時に続いてTVや新聞等で取り上げていただき、社会的注目の高さを改めて感じている次第です。

こうした映画が入口となり、少しでも多くの人に様々な現実を知ってもらうことが問題解決の糸口に繋がるのであれば、今やそれは同時に僕のささやかな喜びです。そんなことを真面目に考えた映画祭でした。コンテンツに恵まれた際は是非協力させていただきます!

来場者の声より

- 映画をみることで具体的な難民の姿がわかるので、とても心が動かされます。
- 日本人以外の人と触れ合う機会の少ない日本ではこういう映画を通して少しでも世界の現状をもっと身近な事として話し合い、行動に移せればと思う。

映画が伝える世界の状況



岩波ホール

岩波ホール支配人

岩波律子さん

岩波ホールでご紹介した世界の名画の中でも、アフリカの難民の少年を主人公にした『約束の旅路』の背景には、私たちの想像を超える歴史や宗教、政治の複雑さがあります。私たちは、生き延びるためにユダヤ人と偽ってイスラエルに移住した少年の激動の運命に胸を揺さぶられました。日本の観客の方々にこの立派な作品を通じてアフリカの状況を知って頂くだけでなく、現地の方々に多少でもお役に立てればと募金を行い、多くの方にご協力を頂きました。日本にも、世界の情勢に関心と理解を持つ人々が増えてゆくことを願っております。

映画を通じて考える



日本UNHCR協会評議員・俳優

滝田栄さん

「最近の映画やテレビは現実逃避型のロマンや切った張った、あるいはお笑いに終始する傾向がある。難民映画祭を通じ、世界で起きている現実を目を向けてもらいたい」第1回「難民映画祭」から参加いただいている俳優の滝田栄さん。映画を通じ、難民と難民をとりまく背景に興味を持って知っていただくことの重要性を熱く語っていただきました。「世界には多くの難民絡みの映画があり驚いた。単に難民キャンプの生活のみでなく、否応なく難民になってしまった普通の人々の日常から発生する悲哀なストーリーなど考えさせられることが大でした」

来場者の声より

- 私は大学で平和について学んでいます。いろんなことを知るたびにたくさんの方のことを学び知れるのに、自分の無力、人の無力を同じくらい知る。しかし、知らなければもっと平和は崩れていく。貴重な機会をありがとうございました。



世界の難民についてよくわかる映画の紹介

1 ルワンダの涙



©BBC, UK Film Council and Egoli Tossell 2005

アフリカの大地で起こった20世紀最大の悲劇。生きるための選択が、そこにはなかった。100日で100万人が殺害された「ルワンダ虐殺」を描いた真実の物語。2006年英国アカデミー賞ノミネート作品。

2 Invisible Children

一見えない子どもたち



©Invisible Children

アメリカに住む3人の大学生がウガンダを訪れた。そこで彼らは、LRA(神の抵抗軍)という反政府武装勢力により平穏な生活を奪われた膨大な数の子供たちに出会う。否応なしに紛争の影響を受けながらも、力強く生きる人々に光をあてる。

3 約束の旅路



父や兄弟を失い、母と2人、難民キャンプにたどりついたエチオピア人の少年。生きるために、母は少年にユダヤ人と偽ってイスラエルへ脱出するよう命じる。母と別れ、故郷から遠く離れ、真実の名前を隠して生きる新しい地。エチオピア系ユダヤ人をイスラエルへ移送するという「モーセ作戦」の史実から生まれ、各国映画祭で圧倒的な観客の称賛を得た感動作。

4 レフュージー・オールスターズ



アフリカ・ギニア難民キャンプで暮らす隣国シエラレオネ出身の6人は、レフュージー・オール・スターズというバンドを結成し、音楽を通して生きる希望を見出してゆく。難民として生活することの意味を考えさせられる感動のドキュメンタリー。